



規範と実際

-比較級の後に位置するwieの用法を手掛かりとして-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 日本独文学会 公開日: 2013-08-27 キーワード (Ja): alsかwieか, 比較級, 模範的規範, 記述的規範 キーワード (En): 作成者: 佐藤, 清昭 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/827

規範と実際

——比較級の後に位置する *wie* の用法を手掛かりとして——

佐藤 清昭

0. 標準ドイツ語を学んだ者にとって、「形容詞・副詞の比較級」の後に来る接続詞 *wie* は耳障りに響く。ところが、*Ihre Wohnung ist viel kleiner wie diese hier; Vollkornbrot bekommt mir besser wie Weißbrot; Schwäbisch ist für mich einfacher wie Hochdeutsch; Nelken halten sich länger wie Rosen; Jetzt kannst du besser spielen wie Beckenbauer* というような例を日常ひんぱんに耳にすると、文法書の単に *als* だけの言及、あるいは *wie* の用法が副次的にすぎないような叙述は当を得ていないのではないか、という疑問が生じてくる。

本論文では、この「比較級の後に要求される接続詞」という論点を手掛かりとして、言語の「規範と実際」という問題の一側面を考えてみたい。以下、文法書におけるこの問題の取扱い方の確認(規範)、ドイツ人に質問した結果の検討(実際)、まとめ、という構成で論を進めていく。

1.1. 次の25冊の文法書・入門書を参考とした。各項末の括弧内の数字は該当ページを示す：日本語で書かれた文法書——① 橋本文夫 (1956)：『詳解ドイツ大文法』三修社 ²³1973 (72 f.)；② 桜井和市 (1968)：『改訂ドイツ広文典』第三書房 (108)；③ 関口存男 (1932)：『新ドイツ語文法教程』三省堂 ⁴1980 (278)；④ — (1947)：『新ドイツ語大講座、基礎入門編』三修社 ⁹1976 (158)；⑤ —『文法詳説編』(39)；⑥ — (1956)：『関口初等ドイツ語講座』三修社 ¹⁰1977 (合本, 429)；⑦ 常木実 (1970)：『標準ドイツ語』郁文堂 (118)。// ドイツ語で書かれた外国人用の入門書——⑧ Heinsen u.a. (1971)：*Auf deutsch bitte!* 2. München ²1973 (24 f.)；⑨ Peters, F. u.a. (1972)：*Sprechen Sie deutsch?* Paderborn (134, 137)；⑩ Schäpers, R. u.a. (1972)：*Deutsch 2000. Band 1.* München ⁵1975 (120–122, 126 f.)；⑪ Schulz, D./Griesbach, H. (1967)：*Deutsche Sprachlehre für Ausländer.* München (119–121)。// ドイツ語で書かれた外国人用の文法書——⑫ Helbig, G./Buscha, J. (1974)：*Deutsche*

Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht. Leipzig (272); ⑬ — (1974): Kurze deutsche Grammatik für Ausländer. Leipzig ²1976 (122). // ドイツ語で書かれた文法書——⑭ Axel Juncker Verlag (1974): Neue Grammatik der deutschen Sprache. München (29); ⑮ Berger, D. (1972): Fehlerfreies Deutsch. Grammatische Schwierigkeiten verständlich erklärt = Duden-Taschenbücher. Band 14. Mannheim u.a. (158–161); ⑯ Der Große Duden. Grammatik der deutschen Sprache. Bearb. von Otto Basler. Leipzig 1937 (246 f.); ⑰ Der Große Duden. Grammatik der deutschen Gegenwartssprache. (Bearb. von Paul Grebe) Mannheim 1959 (225); ⑱ —. 2., verm. u. verb. Aufl. 1966 (233); ⑲ —. 3., neu bearb. u. erw. Aufl. 1973 (260 f.); ⑳ Erben, J. (1964): Abriß der deutschen Grammatik. 7., neu bearb. Aufl. Berlin (170); ㉑ — (1972): Deutsche Grammatik. Ein Abriß. München (193); ㉒ Jude, W. K. (1954): Deutsche Grammatik. Braunschweig u.a. (60); ㉓ Jung, W. (1966): Grammatik der deutschen Sprache. Leipzig (326 f.); ㉔ Schulz, D./Griesbach, H. (1960): Grammatik der deutschen Sprache. München (196 f., 260); ㉕ —. Neubearb. von H. Griesbach. 1972 (127 f., 281 f., 442).

1.2. これらの文法書は、模範的規範 (präskriptive Norm) と記述的規範 (deskriptive Norm) という観点から次のように分類される:

- 1) 記述的および模範的規範として als だけを正しいとする: ④⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑲⑳㉑㉒㉓; ⑯ (wie を禁じる)
- 2) 記述的規範により両者の存在を認める: ②③⑤⑥⑰⑱⑲⑳㉑㉒
- 3) 記述的規範により両者の存在を認めたのち、模範的規範として als の使用をすすめる: ①⑮

1.3. 上記 2), 3) に属する文法書は wie の使用される範囲・頻度については、次のような叙述をしている:

- 日常語において: ② (wie の方が多く), ⑰⑱⑲ (しばしば), ㉑㉒ (広く)
- 地方において: ⑥ (wie も用います), ㉑㉒ (広く)
- 標準語では wie でない: ⑮ (使用頻度の記述無し)
- 使用範囲の記述なし: ① (wie をも用いる), ③ (まれに), ⑤ (または)

1.4. 以上より、調査した 25 冊の文法書のうち 14 冊が als だけを模範的規範

として挙げ、残りの11冊も *wie* の使用は認めながらも、その使用される実態についてははなはだ漠然と叙述しているにすぎないことが明らかとなった。

2.1. この「比較級の後に要求される接続詞」の実際を調査・記述する場合には、一歴史言語内の(この場合はドイツ語の)三種の内的相異 (innere Verschiedenheit) が考慮されなければならない。als と *wie* が、例えば Samstag — Sonntag のように一つの言語体系 (=機能的言語 funktionelle Sprache) の内にある対立 (Opposition) ではなく、Samstag — Sonnabend のように言語体系間で問われる対立であるからである。この三種の相異とは、通所的 (diatopisch, どの地方で?)・通層的 (diastratisch, どの階層で?)・通話的 (diaphasisch, どの表現様式において?) 相異である。*wie* の用法の実際は、この三種の相異に従ってくまなく調査されて初めて明らかとなる。¹⁾

2.2. 本論では、「日常語では」という上記6冊の文法書の記述に従い、通話的相異だけを考慮した。また調査は質問用紙を用いて行った。質問用紙は日常語 (A) と書き言葉 (B) という二つの表現様式について、予備知識なしの解答 (I) と考量後の解答 (II) が得られるよう、次のように構成した：

I: Fall A: Sie sind gerade beim Nachmittagskaffee. Sie befinden sich in Ihrem Wohnzimmer mit Ihrer Familie. Welches Wort setzen Sie in die Klammer des folgenden Satzes ein? „Ja, Wolfgang ist sehr groß geworden. Er ist jetzt größer () seine Mutter.“

Fall B: Sie schreiben in einem Leserbrief an die Zeitung folgenden Satz. Welches Wort setzen Sie in die Klammer ein? „Der Brunnen vor dem Rathaus ist älter () der Brunnen auf dem Marktplatz.“

II: Wenn Sie sich nachträglich die obigen Sätze überlegen, glauben Sie, daß Ihre beiden Ergänzungen grammatikalisch richtig gewesen sind? Welches Wort würden Sie nach eingehender Überlegung grammatikalisch für richtig halten? Fall A: als, wie, beides; Fall B: als, wie, beides.

2.3. 調査結果は次のようになった：配布質問用紙：119。回収解答用紙：95。

1) この三種の内的相異については、例えば下記参照：Eugenio Coseriu：Probleme der strukturellen Semantik. Tübingen 1973, S. 38 ff.

無効解答用紙：2 (I に無解答). 有効解答用紙：93.²⁾

• I と II において同一解答：

I・II	A B	als als	als wie	wie als	wie wie	計
解答者数		56 (60.2%)	8 (8.6%)	1 (1.1%)	1 (1.1%)	66 (71.0%)

• I と II において異解答：

I	A B	als als				als wie		
II	A B	als wie	wie wie	als als/wie	als/wie als/wie	als als	wie wie	als als/wie
解答者数		2 (2.2%)	1 (1.1%)	4 (4.3%)	3 (3.2%)	2 (2.2%)	1 (1.1%)	5 (5.4%)

		wie als			wie wie	計
als/wie wie	als/wie als/wie	als als	als wie	als/wie als/wie	als/wie als/wie	
1 (1.1%)	1 (1.1%)	2 (2.2%)	1 (1.1%)	2 (2.2%)	2 (2.2%)	27 (29.0%)

2) 質問用紙の配布・回収は、1979年10月から約2か月間にわたり行なわれた。解答者の出身地・職業は次の通り：Baden-Württemberg 40, Berlin 10, Bayern 9, Rheinland-Pfalz 7, Schleswig-Holstein 6, Hessen 5, Saarland 5, Nordrhein-Westfalen 4, その他 6, 不明 1；学生 29, 会社員 24, 生徒 12, 主婦 11, 労働者 4, 教師 4, 公務員 4, その他 5。

2.4. この集計結果は次の三点にまとめられる。

イ) wie の用いられる比率は、II・B の場合を除きわずかにすぎない：

	I・A	I・B	II・A	II・B
wie または als/wie という解答者数	9 (9.7%)	21 (22.6%)	13 (14.0%)	32 (34.4%)

ロ) 書き言葉の表現様式 B で wie の用いられる比率が増大している： 上記イの表の A から B への比率の増大を参照。同一の事実、A：als — B：wie という予想外の解答の多さ (I：18, II：11), A：wie — B：als という期待された解答の少なさ (I：6, II：1) に顕著に現れている。

ハ) 考量前と後では、解答に大きな変化は見られない： I と II において異なった解答をした 27 人のうちちょうど三分の二に当る 18 人の解答者は、als・wie とともに正解とする可能性をなんらかの形で採用したものである。

3.1. 解答者の一部は、この als と wie の問題について次のような通所的注釈を質問用紙に付してくれた： Bonn 近郊では wie は広く用いられ、労働者、また 12, 3 歳までの子供たちはほとんどすべての表現様式で wie だけを用いる； Saarland 地方では A・B とともに 80% の割合で wie が用いられる； Nürnberg の南約 50 km に位置する Gunzenhausen 近郊では、A の場合にほとんど常に wie だけが用いられる；³⁾ Baden-Württemberg 州出身の 4 人の学生は、この地方では「比較級+wie」という誤りがあまりに頻繁におかされるという理由から、10—12 歳前後に教師から als を「模範的規範」として学んだそうである。

3.2. さて本調査結果 (2・4・イ, ロ) は、この注釈および筆者の日常の観察とは一致しなかった。しかしこれは、以下のように解釈されるべきである： 本調査は、書き言葉という表現様式における調査であった。すなわち日常語の表現様式 (A) を紙上に作り出すことには困難があり、本来の意図に反して A・B とともに書き言葉のそれとして解答者の語感に訴えたのである。

3) 以上の注釈はしかし、これら解答者たちの「感じ」によるものにすぎない。

日常語という表現様式の設定を例えばテープレコーダーの使用などによって行ったならば、wie の使用頻度が⁵⁾なりの割合で増したであろうことは想像できる。本論文は、この種の調査の難しさを示す一例と言える。⁴⁾

3.3. 本調査の結論は、したがって次のように述べられる：書き言葉においても wie は用いられる。ただし、この場合は als を正しいとする国語教育(模範的規範)の結果として、wie の使用される頻度はわずかにすぎない。

4. 「比較級の後に位置する接続詞」の用法は、「文法」が「模範的規範」から「記述的規範」へと観点を変えるべき例のひとつである。⁵⁾ そしてその記述も、現在までの文法書が行ってきたような不完全なものであってはならない。この als と wie の問題に限らない、上記の三種の内的相異に基づく言語の「実際」の正確な把握は、例えば外国語教育にとっても大きな意義を持つものとなるであろう。

4) この種の調査方法については、William Labov の研究が参考となる。例えば下記の論文を参照：W. Labov: Das Studium der Sprache im sozialen Kontext. In: D. Wunderlich u.a. (Hrsg.): Aspekte der Soziolinguistik. Frankfurt (M) 1972, S. 123-206.

5) Mannheim の Bibliographisches Institut はまったく別な書とは主張しながら (⑪ Vorwort des Verlages), とともに Der Große Duden と称する二つの文法書 (⑫・⑬) が取った、「模範的」から「記述的規範」への観点の変化を参照。